

# 医療コミュニケーション研究におけるレトリック分析の可能性 —震災報道を中心として

杉本なおみ<sup>1</sup>、五島幸一<sup>2</sup>、青沼智<sup>3</sup>

1. 慶應義塾大学
2. 愛知淑徳大学
3. 津田塾大学

---

## 1. レトリック（修辞学）とヘルスコミュニケーション（杉本なおみ）

ヘルスコミュニケーションは「診察室内の医師・患者間の会話」といった狭義の定義に止まらず、広く人々の安全や健康に関わる情報の交換と捉えることができる。この広義の解釈によれば、2011年3月11日に発生した東日本大震災およびそれに続く東京電力福島第一原子力発電所における原子力災害をめぐる報道は、いずれもヘルスコミュニケーション研究の範疇に属することになる。

この震災報道に関しては、発災直後から現在に至るまで、多種多様な批評や分析が行われてきたが、その大半が報道内容の単純比較や取材時の裏話の叙述に止まっている。そのような中、この震災報道を分析するのに適した枠組みとして、レトリック分析的手法がある。

「レトリック（修辞学）」は古代ギリシャに端を発した学問であり、米国中心に発達した現代のコミュニケーション学においても、その根幹を成すものとして広く学ばれている。しかしながら、その存在や重要性が、日本国内の医療関係者に広く知られているとは言い難いのが現状である。

そこで本稿においては、海外メディアによる震災関連報道をレトリック研究の手法を用いて分析した研究成果2例を報告する。これを通じて、ヘ

ルスコミュニケーション研究におけるレトリック分析の可能性[1, 2]について考えたい。

## 2. The New York Times に見る東日本大震災報道（五島幸一）

本項は、The New York Times の報道内容をレトリックの観点から分析し、その中でどのような「疑似現実」[3]が作り上げられているかを考察するものである。分析対象としたのは、2011年3月12日から4月11日1ヶ月の間に The New York Times に掲載された、東日本大震災に関する57件の記事である。

分析にあたっては、記事内容により「エピソード-テーマ」および「被害-復興」という2つの軸で分け、①「エピソード-被害」②「エピソード-復興」③「テーマ-被害」④「テーマ-復興」という4類型に分類した。（図1参照）

具体的には、「エピソード」型が震災地での具体例を取り上げた記事であるのに対し、「テーマ」型には、社会的・国際的・歴史的の文脈から震災被害を論じた、より一般的な記事が含まれる。また、「被害」を中心に据えているのかあるいは「復興」を強調しているのかという論調にも注目して分類を行った。[4]

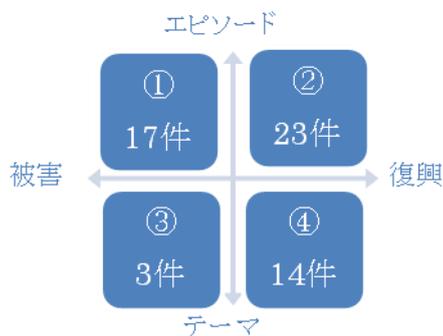


図1: 分析のフレームワーク

### 2-1. 報道内容の分布

57件の記事を上記の枠組みを用いて検証した結果、エピソード型は40件となった。このうち被害を報じる記事は17件、復興を強調する記事は23件であった。一方、テーマ型は17件で、このうち被害を報じるが3件、復興を強調する記事が14件であった。被災地または被害の具体例を取り上げたエピソード型が多く、一般的な内容であるテーマ型は少ないことから、震災後一ヶ月の時点においては、個々の事例を通じて被害や復興の状況を伝える記事が重要視されていることが窺える。

また、エピソード型とテーマ型のいずれにおいても復興を重視する記事が多い点は、アメリカの災害報道全般の特徴に通じるものがある。[5] 過去を重視したり、現在を詳細に検証したりするのではなく、立ち直っていくための努力に焦点を当てた未来志向性はその特徴である。

次に、すべての記事を1週間単位で検証した結果、2週目以降は「エピソード―復興」に関する記事、特に福島第一原子力発電所の事故に関する報道が増加した。原発問題を解決せずして復興は視野に入らないという現実を示していると考えられる。

### 2-2. 記事のレトリック的特徴

次にこの4類型それぞれに属する記事のレトリック的特徴を論じる。まず、①「エピソード―被害」型の記事には、無力、恐怖、予測不可能性、政府の無能さが現れている。すなわち、この類型の記事の中では、これまでの経験が役に立たない、あるいは限界がある、といった経験の無力化が表出されている。

次の②「エピソード―復興」の記事では、復興に際し、被災者が落ち着いて行動していることを指摘し、真面目で忍耐強い日本人像を描き出すことで、日本人の行動様式や価値観を肯定的に報じている。またこれとは反対に、政府や東京電力を非難し、負のイメージを被せ、復興を妨げる障害として意味づけている。このようにして、一般市民と政府・東京電力のコントラストの構図を描き出しているのがこの類型の特徴である。

三つ目の③「テーマ―被害」の記事は、社会的・歴史的な文脈から被害を考証するものであるため、新聞記事というよりも論文的な色彩が強い。具体的には、この震災の被害の大きさが従来の想定以上であったことから、各種予測を再び見直す必要性を論じている。

最後の類型は④「テーマ―復興」である。ここでは、復興を被災地だけの問題としてではなく、日本全体、ひいては世界規模の視点で捉えている。(1)日本の先行きは不透明ではあるが、日本人の努力が期待できること、(2)原発の建設では、アメリカは日本よりは用意周到であり、安全であること、(3)今回の震災のような超自然現象の前では人間は無力であることといった論旨が展開されている。

### 2-3. 米国内の災害報道との比較

今回の一連の報道が、米国内で発生した災害の報道と似ているのは、悲劇を伝えると同時に、

復興への道のりは険しいながら、被災者(すなわち日本人)の価値観、倫理観、努力に着目し、復興へと向かう日本国民の姿勢を積極的かつ好意的に取り上げている点である。

一方、米国内の災害報道とは異なる点としては、コントラストな報道の仕方がある。震災と原発事故に関しては、「人々」対「政府・東電」、また原発建設に際しての用意周到さに関しては「アメリカ」対「日本、というように、それぞれ二つを対照的に描き出していることが挙げられる。このようなコントラストを構図として用いることで、アメリカ市民に日本人への期待、そして自国アメリカに対する安心感を強くアピールしている。

### 3. メディア (コン) テキストとしての原子力災害報道—「Fukushima 50」のレトリック (青沼智)

本項では、東京電力福島第一原子力発電所事故に関する一連の海外報道で描かれた、事故現場に残り作業に従事する 50 人の名もなき作業員たち (the faceless 50; the unnamed operators)、いわゆる「Fukushima 50」の物語を、ケネス・バーク (Kenneth Burke) が提唱したペンタッド (pentad) [6] に基づき分析する。具体的な分析対象としては、「Fukushima 50」を最初に報道した“Last Defense at Troubled Reactors: 50 Japanese Workers” [7]および“Japan Hails the Heroic ‘Fukushima 50’” [8] の 2 編を選んだ。

#### 3-1. 分析手法としてのペンタッド

ペンタッドとは、これまで法廷弁論 [9]、選挙演説 [10][11]、マスメディア [12] 等、様々なコミュニケーションの定性分析に広く用いられてきた、5 つの

基語からなるレトリック理論の枠組みである。<sup>1</sup> これは「誰(行為主体)」が「どこ(場面)」で「どのような方法(媒介・方法)」で「なぜ(目的)」 「何をした(行為)」により構成される。報道コミュニケーションの原則としてよく知られる「Five Ws (who, what, when, where, why)」や「5W1H (Five Ws + how)」と一見似てはいるが、ペンタッド分析の意義は、コミュニケーションされたメッセージ(報道)の客観性や妥当性を測るのではなく、むしろ、メッセージの劇学的つまりドラマテイスティックな解釈を通じ、コミュニケーションの「主観」を見極めることにある。

例えば、自分にとって「喜劇」と感じたある出来事が、他者にとって「悲劇」として映る、という経験は誰もが多少なりとも持っているだろう。つまり、物事に対する人間の認識は多分に主観的であり、かつドラマ的なものだ。言い換えれば、「誰が・どこで・どのような方法で・なぜ・何をした」というペンタッド的記述は、現実世界をあたかもドラマのごとく描いていることに他ならず、そこにおけるキャスティング、場面設定等は、劇作家・演出家たるコミュニケーションが一体何を伝えたいのかという、主観や意図によるのである。

#### 3-2. 「Fukushima 50」というドラマ

「Fukushima 50」というドラマの基本要素を、このペンタッドの枠組みに基づき表せば以下のようになる。

行為主体: 名もなき 50 人の作業員

行為: 作業に従事

媒体・方法: 事故現場に留まる

場面: 福島第一原発敷地内

目的: 原発の復旧

<sup>1</sup> pentad の penta は、「5」という意味を持つギリシャ語起源の接頭辞である

もちろん、これだけでは、メディアが「Fukushima 50」を伝える意図、つまりどこに報道価値を見出したのかは分からない。次に、New York Times および BBC の記事中にみられる主たる劇的表現を抽出し、再びペンタッドの枠組みで提示したい。

行為主体:「750名の作業員が既に引き上げた後、消防士やエリート軍事部隊のごとく、与えられた任務を忠実に遂行するプロ軍団」[7];  
「日本の最後の砦」[7]  
行為:「重い酸素ボンベを背負い、息苦しい中での作業」[7];  
媒体・方法:「自らの命を危険に晒す」[8];「防護服は申し訳程度」[7]  
場面:「機器・機材が迷路のように入り組んだ、懐中電灯だけが頼りの真っ暗闇」[7];「頻発する水素爆発」[7]  
目的:「家族を先に避難させ、自分は任務のために最後まで残る」[8];「公のために、個を犠牲にする日本人の美德」[7]

端的に言えば、「Fukushima 50」とは報道の名の下で描かれた「英雄物語」であり、その報道価値は、描かれた物語のドラマテシテックな側面にあったのだ。例えば、「消防士やエリート軍事部隊のごとく、与えられた任務を忠実に遂行するプロ軍団」という行は、勇敢な消防士の活躍を描いた『バックドラフト』やトム・クルーズ扮する海軍エリートパイロットが主役の『トップガン』といった映画を連想させる。また、危機的な状況の中で「自らの命を危険に晒す」「家族を先に避難させ、自分は任務のために最後まで残る」といった部分は、『アルマゲドン』や『インデペンデンス・デイ』といったハリウッドの娯楽大作にありがちなプロットだろう。

### 3-3. メディア (コン) テキストとして埋もれる災害・震災

東日本大震災および福島第一原発の国際基準「レベル7」事故は、私たちにとって未曾有の人災・天災であり、福島・日本から物理的な距離を隔てた北米大陸や西ヨーロッパでも、それらに関する報道が多くなされている。しかしその中には「対岸の火事」的な論調の報道が少なからず存在する。特に「Fukushima 50」に代表されるような、出来事のドラマ性をニュースバリューとする報道においては、原子力災害さらには震災までもが、伝えられるべきテキスト(本文)ではなく、コンテキスト(本文の背景;文脈)として埋もれている。それは、私たち人間が、概して「感動」や「心温まる」物語を嗜好し、現実をドラマ的に認識・表現・解釈し、さらには医療情報までも『ER』『Chicago Hope』(さらには『仁』『救急病棟 24 時』『ブラックジャック』)といったフィクションから得る[13]ことが常であることを考えるとある程度仕方ないことかもしれない。

#### 【参考文献】

- [1] Segal, J. Z. (2005). Health and the Rhetoric of Medicine. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press.
- [2] Cali, D. D., & Estrada, C. (1999). The medical interview as rhetorical counterpart of the case presentation, Health Communication, 11(4), 355-373.
- [3] Boorstin, Daniel 1987 The Image: A Guide to Pseudo-events in America (25th anniversary ed.) New York: Vintage Books.
- [4] Iyengar, Shanto 1991 Is Anyone Responsible? : How Television Frames Political Issues, Chicago, IL: University of Chicago press.
- [5] 五島幸一 1993「災害報道のレトリック的分析—米国の新聞を中心として」『時事英語学研究』32

- 号、pp. 1-16, 五島幸一 2005「アメリカにおける災害報道のレトリック的分析—New York Times を中心として」『時事英語学研究』44号、pp. 1-14
- [6] Burke, K. *A Grammar of Motives*. Berkeley: University of California Press, 1945 (ケネス・バーク、*動機の文法*(森常治訳)、晶文社; 1982年).
- [7] Bradsher, K., & Tabuchi, H. (2011). Last Defense at Troubled Reactors: 50 Japanese Workers. March 15, 2011. *The New York Times* (online). Retrieved at Workers at Fukushima Plant Brave Radiation and Fire - NYTimes.com
- [8] Hogg, C. (2011). Japan Hails the Heroic 'Fukushima 50' March 17, 2011. *BBC News Asia-Pacific*. Retrieved at <http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-pacific-12779510>
- [9] Sanbonmatsu, A. Darrow and Rorke's Use of Burkean Identification Strategies in New York vs. Giltow (1920). *Speech Monographs*, 38 (1971), p.36-48.
- [10] Ling, D. A. A Pentadic Analysis of Senator Edward Kennedy's Address to the People of Massachusetts July 25, 1969. *Central States Speech Journal*, 21 (1970), p.81-86.
- [11] Blankenship, J., Fine, M. G., & Davis, L. K. The 1980 Republican Primary Debates: The Transformation of Actor to Scene. *Quarterly Journal of Speech*, 69 (1983), p.25-36.
- [12] Brummett, B. (1981). Burke's representative anecdote as a method in media criticism. *Critical Studies in Mass Communication*, 1, 161-176.
- [13] Harter, L. M., & Japp, P. M. Technology as the Representative Anecdote in Popular Discourses of Health and Medicine. *Health Communication*, 13 (2001), p.409-425.